構造計算適合性判定 指摘事例集　－よくある指摘事例とその解説－　　2021年版

「正誤表」（2023年版）

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| ページ | 行 | （誤） | （正） |
| 3.1.4-2 | 27 | 各荷重時の曲げモーメント分布を図―２に示す． | 各荷重時の第１層の曲げモーメント分布を図―３に示す． |
| 3.1.4-2 | 36 | つまり，柱端モーメントに関しては，鉛直荷重時と地震荷重時で十数％違うということである．また，軸方向変形を無視しているため，外柱に対する比は均等スパンであれば多スパンになっても同じである．多スパンの高層骨組において，柱の曲げモーメントに対する比が十数％異なった場合、柱軸方向変形の影響を考慮しても長期荷重時の柱曲げモーメントの相違はさらに小さくなり，結果として柱軸方向変形の影響による短期荷重時の柱の曲げモーメントの相違は数%にすぎないことになる．また，同様に梁の曲げモーメントの相違は数%にすぎないことになる． | つまり，柱端モーメントに関しては，鉛直荷重時は地震荷重時の十数％である．ここでは軸方向変形を無視しているため，外柱の曲げモーメント比は均等スパンであれば多スパンになっても同じである．多スパンの高層骨組において，柱軸方向変形考慮の有無により鉛直荷重時の柱曲げモーメントが20～30％相違したとしても，鉛直荷重時と地震荷重時の柱曲げモーメント比が十数%であれば，短期荷重時の柱の曲げモーメントの相違は数%にすぎないことになる．また，同様に梁の曲げモーメントの相違も数%にすぎないことになる． |
| 3.1.6-3 | 9 | *αy*=(0.043+1.64*npt*+0.43*a/D*  +0.33*η*0)(*d/D*)2 | *αy*=(0.043+1.64*npt*+0.043*a/D*  +0.33*η*0)(*d/D*)2 |
| 3.2.1-5 | 四角内11 | *P*2×(4×1+3×0.75+2×0.5+1×0.25)*δ*=9.75*P*2*δ* | *P*2×(4×1+3×0.75+2×0.5+1×0.25)*δ*=7.5*P*2*δ* |
| 3.2.6-1 | 図-1 |  | *T*  *M*  *C* |
| 3.2.6-3 | 図-4 |  | D  C  A  図  検定断面A |
| 3.2.6-3 | 17 |  |  |
| 3.2.6-4 | 18 | 付着信頼強度式は「図-3　付着割裂パタ-ン」の | 付着信頼強度式は「図-3　付着割裂パターン」の |
| 3.2.6-5 | 4 | *Kst*=140*Aw*/(*dbs*) | *Kst*=140*Aw*/(*dbs*) |
| 3.2.6-7 | 図-7  （A） |  | *d* |
| 3.2.6-7 | 図-7（B） |  | ***y*** |
| 4.1.1-3 | 6 | Σ*cMpn*≧min{1.5*bMp*，1.3*bMpn*} | Σ*cMpn*≧min{1.5*bMp*，1.3*pMpn*} |
| 4.2.3-2 | 14 | (4) 壁厚（*t*）と梁幅（*B*）が曲げせん断剛性増大率に及ぼす影響：** 3 | (4) 壁厚（*t*）と梁幅（*b*）が曲げせん断剛性増大率に及ぼす影響：** 3 |
| 5.3-1 | 11 | Terzahi | Terzaghi |